

永井博先生を悼む 永井先生のこと

著者	齋藤 博
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	4-5
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122489

永井先生のこと

齋藤 博

永井先生は筑波大学を退かれてから東海大学に在籍されました。たまたま大学の図書館でお目にかかった折、そこに居合わせた私の同僚の外国人に、「私の *Doktorvater* だ」と先生を紹介したことを思い出します。先生は私にとりましては *Doktorvater* であります。今でも私の耳の奥に残っているのは、先生が何気なく口にされる *Auseinandersetzung* というドイツ語です。実はこれは *Doktorvater* の *Doktoranden* に対する先生の基本的な態度表明、あるいは宣告であったのだといまさらながら思います。*Auseinandersetzung* には批判的に厳しく対決するという意味が含まれていません。しかしそうした先生の構えは、実際は *Doktoranden* を追い詰めるような厳しさではありませんでした。

たしかに永井先生は厳しい方でした。俗な言い方をすれば、学生にとっては、とっつき難いところがありました。そうした先生にいい加減でずさんな私が論文を提出することになったきっかけは思い出せません。それにつけても、いまから思えば、ドクター論文を提出したいという私の申し出は、身の程もわきまえぬ若者の、無謀な所業でありました。しかし先生はこの若者の無謀な挑戦をそのままにお認め下さった。先生は身の程をわきまえぬ若者の申し出を快く受け容れて下さっただけでなく、*Doktorvater* として極めて積極的に親身な指導に当たって下さいました。拙論の草稿に丁寧に目を通していただき、私の不注意な誤字まで穏やかに御指摘を頂戴したことでした。

先生の厳しさの原点は、思うに、何よりもご自分の生活と学問に対する厳しさにあったと言えます。御自身の生活と学問に対して大変厳しい方でありながら、しかし先生はその厳しさを、積極的には、他人に求めることはなさらなかった。あるいはそれが先生のとっつき難さの原因になっていたのでしょうか。先生の厳しさは御自身に向けられたものであったためでしょう、私はその厳しさから権力のようなものを感じたことはありません。いわゆる厳しさには権力の後ろ盾が見え隠れしても不思議ではないのに、むしろそうしたものからは無縁な寛柔さが感じられました。あり難い

ことに、先生の厳しさは私にとって身につけたい課題になっています。

もうひとつ、私にとってあり難いことは、これも、どうしたきっかけであったか思い出せないのですが、とっつき難い先生に、教室だけでなく、先生のお宅にまでしばしばお邪魔できたことでもあります。先生だけでなく御家族の皆様にかなり御迷惑をおかけしたはずなのに、そのことに当時の本人はなにも気づくこともなく、ときには長いことお邪魔して奥様のお手料理を頂くこともよくありました。しかしこれも筆者には思わぬ幸運をもたらすことになりました。筆者にとっては、いわば先生の学問の楽屋裏に入り込む好機になったからです。

楽屋裏といえば、役者が舞台上上がる前に与えられた役作りをする裏の世界です。しかしそれなしに表舞台は成り立たないことも明らかです。研究者の学問に接するにはその楽屋裏にも入り込めという奨めを耳にしたことはあります。学問がどのように研究者によって醸成されているかを知るよき手がかりになるからというのです。それにしても筆者はその当時、自覚して先生の楽屋裏を訪れる意味が分かっていたわけでもありません。そうした団欒の折に、先生が何気なく語られたのが、いましがた挙げた *Auseinandersetzung* というドイツ語です。いまから思えば、学問にはこのことが必要不可欠だとひそかに反芻されていたのでしょう。先生の楽屋裏は、いわば先生ご自身の生活世界でもあります。公にされた先生の豊かな哲学的業績と御自身の生活世界を結びつけて先生の哲学を理解する機会に恵まれことはあり難いことです。

(さいとう・ひろし 東海大学名誉教授)